

「マラッカ 3 国」という呼称の由来について

佐藤考一

拙著『獅子の町・海峡の風～マラッカ 3 国の社会・文化・自然～』めこん刊、2004 年、において、副題に「マラッカ 3 国」という呼称を用いたところ、JAMS News No.31 (2005)において、拙著の紹介をして下さった山本博之先生をはじめ、何人かの方から「そういう呼称は初耳だが、由来は何か」という御質問を受けたので、わかる範囲のことを記して見たい。

まず、マラッカ 3 国という呼称自体はもちろん、筆者の造語ではない。この呼称はインドネシア・マレーシア・シンガポールの、マラッカ海峡沿岸 3 国(地理的区分から厳密に言うなら、マラッカ・シンガポール海峡沿岸 3 国が正しい)を指すが、日本の東南アジア研究、特に安全保障問題の専門家の間では、少なくとも 1970 年代から使われていた。例えば、黒柳米司「ASEAN における制御された対立」岡部達味編『ASEAN をめぐる国際関係』日本国際問題研究所、1977 年、182 頁、にこれが使われている(黒柳教授は、近著『ASEAN35 年の軌跡』有信堂、2003 年、でも、36 頁と 62 頁でこの呼称を使っておられる)。

以下は、筆者の推測である。この 3 国には「マレー 3 国」という呼称もあり、エスニックな文脈から見ればそれが正しい。だが、同時にこれら 3 国の間の関係は 1960 年代から 70 年代にかけて相当緊張しており、それがシーレーン(海上交通路)のチョーク・ポイント(窒息点、転じて急所の意)であるマラッカ海峡の安全とも複雑に関わっていた。日本の安全保障専門家たちから見れば、

「マラッカ海峡は石油輸送のための日本の生命線」であり、これを意識してその沿岸の 3 国の略称を「マラッカ 3 国」にしたのではないか、ということである。

ちなみに日本で長くマラッカ海峡の安全に関わってきた団体に、(財)マラッカ海峡協議会がある。同協議会は、第二次大戦後にマラッカ海峡を通過する船舶が大型化したことから、砂洲や暗礁を避けて安全な航路を設定する必要が生まれ、インドネシア・マレーシア・シンガポールの 3 国と協力して同海峡の測量や航路整備をするために運輸省の外郭団体として 1968 年に設立されたものだが、1978 年に出版した『マラッカ・シンガポール海峡航路整備事業史』(非売品)の 15 頁や 151 頁で、これら 3 国を「沿岸 3 国」と呼んでいる。

マラッカ海峡の安全のみを扱う専門家の間では、「沿岸 3 国」で十分理解できるわけである。だが、これではさすがに部外者には何のことだかわからない。「マラッカ 3 国」という略称も、安全保障研究者の特殊用語というべきかも知れない。小生のように、東南アジアで海ばかり見てきた人間の盲点であろう。安全保障問題だけを意識しているわけではない、他の分野の研究者の方には奇異に映ったものと思われる。御海容を御願ひする次第である。また、もし他にこの呼称の由来を御存知の方がおられたら、是非御教示頂きたい。